

Q. 7 学習評価の具体的な方法について、教えてください。

A. 学習評価は、場面や学習内容に応じて、いくつかの方法を用いて行います。例えば、授業中であれば生徒の発言や行動に対して評価言を返すことや、机間指導の際に子どものノートやワークシートの記入状況を見て、支援とともにチェックや印を入れて評価を行うことができます。あるいは、授業後にはノートやワークシートを集め、コメントを付けて返すことで、その学習の評価を子どもに伝えることもできます。このように、いくつかの方法を用いて多面的に評価することが大切です。どの場面で、どんな方法で評価するのか、あらかじめ計画を立てておくといよいでしょう。以下に、主な評価方法を挙げましたので、参考にしてください。

○主な評価方法

◇観察法

教師があらゆる学習場面において、子どもの活動状況や態度を観察することです。この観察は評価にとって重要な資料となります。例えば、家庭科の調理実習で、『関心・意欲・態度』を子どもの行動観察で評価するとします。評価規準を「見本を見ながら、材料を適切な大きさに切ろうとしている」と設定したならば、材料を切るといふ子どもの行動を観察し、評価規準に照らしてその状況の評価することになります。

ただ、評価するための観察に追われて適切な指導ができないようなことがあつては、何のために評価をしているかわからなくなってしまうです。評価すべき行動や状態をあらかじめ規定しておくことや、子どもの行動を予測して、つまりきに対応できるようにしておくことが大切です。

◇自己評価

評価の対象者となる子ども自身が、評価の主体となって自分の学習を振り返ることをいいます。学んだ事柄を自ら評価することで主体的な学習を促します。

子どもは、教師が自分を受け入れてくれるという思いがなければ、自己評価で自ら思ったことや気付いたことを素直に表現することは難しいでしょう。教師に子どもの素直な気持ちを受けとめる余裕や公平さが求められます。

また、子どもが否定的な自己評価をした場合でも、教師は、認めたり、励ましたりして次の学びにつながる自己評価としたいものです。子どもと教師の良好な人間関係があつてこそ、適切な自己評価につながると言えます。

◇相互評価

相互評価とは、子ども同士が互いを評価し合うことです。ここで大切なのは、互いに信頼し、認め合っている関係の中でこそ、相互評価が成立するということを子どもにも周知させておくことが大切です。

◇パフォーマンス評価

パフォーマンス評価は、一般的には、習得した知識・技能を使いこなす能力を評価することです。評価の方法には、日常的な観察や対話による評価、自由記述式の問題による筆記テストや実技テストによる評価、パフォーマンス課題（完成作品や実演）による評価などが含まれます。

なお、『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』（平成22年3月24日、

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会)には、パフォーマンス評価について、次のように記されています。

思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって、『パフォーマンス評価』に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等により評価するという複雑なものまでを意味している。または、それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。

◇ポートフォリオ評価

ポートフォリオとは、子どもの学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集めたものです。このポートフォリオを用いて、学びのプロセスや成果を長期的に評価します。子どもの自己評価を尊重しながら、子ども同士の相互評価や教師のコメントなども加えながら多面的に評価します。長期の指導計画を実施する際や、思考力・判断力・表現力のような長期間かけてはぐくまれる能力の評価には有効な評価方法の1つです。

◇ペーパーテスト（教師自作テスト）

教師が子どもの学習の実態を的確にとらえ、効果的な指導をするために作成するテストです。単元（題材）ごとや1単位時間ごとに行う小テストと、期末テストなどの定期テストがあります。

自作テストの作成にあたっては、次のことに留意しましょう。

- * 学習内容と密接に関連した問題を出題し、目標がどの程度達成されているかを把握する。
- * 4観点との関連を明確にした問題を作成し、評価すべき学習状況や観点に合わせた解答方法の工夫をする。



また、テストの結果をもとに、次の授業改善に結び付けていくことが重要です。

○単元（題材）における評価で注意すること

◇単元（題材）目標と評価規準の設定

単元（題材）目標は、その単元（題材）の学習活動を通じて子どもたちに身に付けさせようとしている資質や能力を明確にするために、観点別に設定します。（教科によってはこの限りではありません。）各教科等の学習指導要領解説をしっかりと読み、児童生徒の実態把握のための診断的評価を取り入れ、適切な目標を設定しましょう。そして、目標の実現状況を判断する評価規準を設定します。

◇指導計画と評価計画の作成

単元（題材）の指導計画を作成する際には、学習活動が目標達成につながる展開になるよう組み立てます。ここでも、診断的評価を取り入れるとよいでしょう。また、指導と評価の一体化を図るために、評価の計画を位置付けることが大切です。目標に設定した各観点について、単元（題材）のどこで評価するのか、評価する場面と評価規準、方法を明確にします。

その際、児童生徒のどのような姿が『おおむね満足できる』状況なのか、『十分満足できる』状況なのかを具体的にしておきましょう。さらに『おおむね満足できる』状況に至らない子どもがいた場合の手立てについても想定します。評価規準を作成する際は、国立教育政策研究所作成の『評価規準の作成のための参考資料』に示された『内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価

規準の設定例』を参考にするとよいでしょう。【Q. 2 参照】

◇授業の中で評価する

授業では、指導と評価の一体化を図ることが大切です。〔形成的評価〕

評価計画に基づいて意図的、計画的に子どもの学習を評価するとともに、子どものさまざまな反応や評価結果に柔軟に対応し、支援に生かしましょう。また、評価の妥当性や信頼性を保つために、授業中の子どもの様子を記録に残すことも大切です。

◇単元（題材）の評価の総括

1つの単元（題材）が終わると、一人一人の観点別学習状況をまとめます。あらかじめ作成した評価規準に照らして、授業の記録やテストやレポートなどの学習成果をもとに評価します。〔総括的評価〕

単元（題材）ごとの総括的評価は、学期末の総括的な評価・評定に生かされます。また、この評価をもとに、指導計画を練り直したり、評価計画を見直したりすることも必要です。

学力の要素と4観点

学校教育法及び学習指導要領の総則においては、

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③主体的に学習に取り組む態度



を育成することが示されています。これらの学力の要素を踏まえて、評価の観点は『関心・意欲・態度』『思考・判断・表現』『技能』『知識・理解』の4つの観点に整理されました。

*各教科等の評価の観点はこれらを基本としつつ、各教科等の特性に応じて設定されています。

各観点の評価に関する考え方

『関心・意欲・態度』

各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『思考・判断・表現』

それぞれの教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『技能』

各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『知識・理解』

各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価します。

評定

評定は、各教科における児童生徒の学習状況を総括的にとらえるもので、小学校（第3学年以上）は3段階で、中学校と高等学校は5段階で評価します。各単元（題材）で総括した観点別評価の結果を、学期末や学年末に総括し、通信簿や指導要録に記載します。